

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00606

研究課題名(和文)高精度コーパスにもとづく近世江戸語文法の「通説」の再検証

研究課題名(英文) A Reexamination of the "Common Sense" of Early Modern Edo Grammar Based on a Highly Accurate Corpus

研究代表者

岡部 嘉幸 (OKABE, Yoshiyuki)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：80292738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、形態論情報・文脈情報を付与したコーパスの構築とコーパスに基づく近世語文法の「通説」の再検証および新事実の発見という2つの目的をもつ。

の成果としては、会話データに話者情報(話者名・話者の性別・話者の社会的属性等)を付与し、精密化を図った「人情本コーパス」の8作品の構築が挙げられる。の成果としては、当該のコーパス等を利用して指定表現の否定形態(ジャナイ、ジャアアリマセンなど)の実態調査を行い、指定表現の否定形態には、上方が江戸かによる地域差、『洒落本』か『人情本』かという資料差、話者属性による差があることを実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、多くの先学たちによって明らかにされてきた近世江戸語文法の「通説」を、形態論情報や話者情報を付与した精密なコーパスを利用した計量的な手法によって再検証するとともに、これまで気づかれてこなかった近世江戸語文法に関する事実を、実証的に示した点にある。また、現段階では作成途上であるが、精密な形態論情報と話者情報を付与した近世語コーパスをweb上で公開することによって、近世語およびその関連領域の研究者や日本語史に関心をもつ社会の人々がコーパスを気軽に利用できるようになることも本研究課題の社会的意義だと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research has two objectives: construction of corpora with morphological and contextual information, and reexamination of the "common beliefs" of early modern Japanese grammar and discovery of new facts based on the corpus. The outcome of is the construction of corpora of eight "ninjyo-bon" works which are refined by adding speaker information (speaker name, speaker gender, speaker's social attributes, etc.). As an outcome of this research, I conducted a survey of the actual situation of the negative forms of copula(-jyanai, jyaarimasen, etc.) using these corpora, and empirically clarified that there are regional differences in the negative forms of copula, differences between "share-hon" or "ninjyo-bon" and differences depending on the speaker attributes.

研究分野：日本語学

キーワード：近世語 江戸語 文法 人情本 コーパス

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題研究代表者の核心をなす学術的問いは、現代において我々が使用している「現代語(現代標準語)」の出自の一つである「近世後期江戸語」(以下、江戸語)の文法体系は、どのような特徴を持っていたのかということである。そして、その「問い」に明確に答えるためには、以下の二つの「問い」に答える必要がある。一つは、「江戸語と時間的に接続し、文法体系が似通っている現代(標準)語と江戸語の間には文法的にどのような共通点と相違点があるのか」という「問い」であり、もう一つは、「江戸語の形成に深く関わり、江戸語成立以後も相互交渉のあった同時代の上方語と江戸語の間には、文法的にどのような共通点と相違点があったのか」という「問い」である。

以上のような関心のもと、これまで、上記の「問い」を中心に研究をすすめ、岡部 2011「現代語からみた江戸語・江戸語からみた現代語 ヨウダの対照を中心に」(金澤・矢島編『近世語研究のパスpekティブ』、笠間書院) 岡部 2011「否定と共起する「必ず」について 近世後期江戸語を中心に」(『人文研究』40)などによって江戸語の文法形式の特徴を明らかにし、従来の研究においては補助的な手段でしかなかった現代語との対照に基づく江戸語文法の分析という手法が有効であることを実証・理論の両側面から示した。さらに、これらの成果を受けた「現代語との対照に基づく近世江戸語文法形式の意味・機能に関する研究」(2013-17年度科学研究費補助金(基盤研究C) 課題番号 25370509、研究代表者:岡部嘉幸)や岡部 2014「近世江戸語のハズダに関する一考察 現代語との対照から」(青木博史ほか編『日本語文法史研究 2』、ひつじ書房)などにおいて、より広い範囲の文法形式の分析を行い、この「問い」にある程度の見通しを得ることができた。これに引き続き、本研究課題では、核心をなす学術的「問い」に答えるためのもう一方の必須条件であるこの「問い」に答えることを目指した。この「問い」は、これまでの研究においても十分に意識化されてきたことであり、すでに多くの先行研究によって「通説」といってよい諸事実が明らかにされている。例えば、指定表現において江戸語は「ダ」を用いるが、上方語は「チャ」を用いるということなどがこれにあたる。しかし、このような「通説」にも問題がないわけではない。これらの「通説」は、基本的には研究者の手作業によって収集された用例を、研究者の経験に基づいて分析した結果であり、計量的手法によって検証されたものではないからである。近年、国立国語研究所によって日本語歴史コーパスが整備されつつあり、また、本研究課題実施者自身も国立国語研究所などと連携しつつ、近世語コーパス(電子テキスト)の構築をすすめてきているなど、資料面での基礎的な研究環境も整備されつつある状況であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、近世上方語と対比する形で記述されてきた近世江戸語文法の「通説」について、精密な形態論情報および文脈情報を付与したコーパスにもとづく計量的手法を用いて再検証を行い、その通説が合理性をもつのか否かを検討し、通説の仕分けを行うとともに、コーパスにもとづく計量的手法を用いることで、これまで気づかれてこなかった江戸語文法の新事実を発見することにある。

### 3. 研究の方法

本研究は、大きく、(ア)精密な形態論情報および文脈情報を付与した近世語コーパスの構築と、(イ)近世語コーパスに基づく計量的手法による近世語文法の「通説」の再検証および新事実の発見という2つの目的をもつ。

(ア)の目的達成のために、研究代表者がこれまでに受託した科学研究費補助金によって構築した「人情本」を主資料とする近世語コーパスのうち、少なくとも2作品について、国立国語研究所コーパス開発センターが開発した形態解析用辞書「近世口語(洒落本)UniDic」と解析器による自動解析を行い、人手修正を経た上で、形態論情報を付与したコーパスの構築を行う。形態素解析および形態論情報付与については、申請者が連携研究者となっている「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」(2015-19年度科学研究費補助金(基盤研究(A))など)と連携しつつ、連携研究者と共同で行うとともに、研究協力者に謝金業務として作業を依頼する。また、文脈情報(話者属性、文体属性など)の付与については、構築した形態論情報付きのコーパスに人手で情報を加える形で作業を行う。これは、当該の情報付与が機械による自動付与には向かない作業だからである。作業は申請者と連携研究者が共同で行うとともに、研究協力者に謝金業務として作業を依頼する。

(イ)については、目的達成のための基礎作業として、文献収集および先行研究における論点の整理を行う。そのうえで、否定辞における連母音の長母音化の問題(江戸:ネエ vs. 上方:ナイ)、否定過去形の形態(江戸:ナカッタ vs. 上方:ナンダ)、指定辞の形態(江戸:~ダ vs. 上方:~チャ、~ナ)の問題などをとりあげ、「通説」としての合理性を統計的な観点から再検証する。また、形態論情報および文脈情報付きのコーパスであることの特徴を利用して、統計的観点から見た江戸語文法に関わる新事実の発見を目指す。

最終年度には、再検証の結果について、国内外の学会での学会発表や学会誌への投稿を行い、広く専門家の意見を求める。

#### 4. 研究成果

目的(ア)精密な形態論情報および文脈情報を付与した近世語コーパスの構築に関しては、以下の成果があった。

- ・すでに構築してある人情本コーパス8作品から、会話データ7,309データを抽出し、それら対象に、文脈情報として話者情報(話者名・話者の性別・話者の社会的属性等)の付与を行った。また、それと同時に、会話データと原本との対照による会話データの校訂作業も行い、コーパスの精密化をはかった。
- ・研究代表者が共同研究員となっている国立国語研究所が構築している「日本語歴史コーパス」(CHJ)のサブコーパスである「江戸時代編 人情本」に、本研究課題が構築した文脈情報(話者名、身分、性別など)の実装を行うための打ち合わせを行った。しかし、研究代表者が現在部局長の任にあるため、十分な作業時間が確保できず、CHJのサブコーパスへの実装を実現することができなかった。サブコーパスへの実装は本研究課題終了後の課題として引き続き対応する予定である。

目的(イ)近世語コーパスに基づく計量的手法による近世語文法の「通説」の再検証および新事実の発見に関しては、以下の成果があった。

- ・当該の『人情本コーパス』のデータや、国立国語研究所によって既に構築されている『洒落本コーパス』等を利用して指定表現の否定形態(たとえば、「～じゃない」、「～じゃありません」等)の実態調査を行った。その結果、指定表現の否定形態には、1.江戸語か上方語かによる違い(江戸語では指定辞部分にジャアという長呼形を使用するが、上方語ではジャという短呼形を使用するなど)2.『洒落本』か『人情本』かという資料による違い(『洒落本』では男女による形態の位相差がそれほど大きくないが、『人情本』では位相差がかなり大きい等)3.話者属性による違い(『人情本』の場合、男性は丁寧体(たとえば、ジャアアリマセン)を使用しない傾向があるが、女性は使用する傾向にある等)があることが明らかになった。これらの研究成果については、岡部嘉幸(2019)「洒落本の江戸語と人情本の江戸語 指定表現の否定形態を例として」(『国語と国文学』令和元年5月号)として学界に公表した。
- ・指定表現の否定形態(たとえば、「～じゃない」、「～じゃありません」など)の江戸語的特徴を、さらに、近代東京語や近代京阪方言と比較・対照することを通して、近世江戸語・近世上方語から近代東京語・近代京阪方言への通時的变化を明らかにすることができた。近世江戸語から近代東京語への変化としては、指定辞部分で「じゃあ」という長呼形から「じゃ」という短呼形への変化が見られること、否定辞部分で音訛形「ねえ」優先使用の状態から非音訛形「ない」と音訛形「ねえ」の併用使用の状態への変化が見られることが明らかになり、近世上方語から近代京阪方言への変化としては、「じゃない」から「やない」「やあらへん」への変化が生じていることが明らかになった。以上の研究成果については、岡部嘉幸(2019)「近世江戸語における指定表現の否定形 - 近世上方語および近代東京語・京阪語との比較」金澤裕之・矢島正浩編『SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究』(笠間書院)として学界に公表した。
- ・オンラインで開催された国際学会 16th International Conference of the European Association for Japanese Studiesにおいて、コンピナーとして"Studies of Early Modern Japanese Based on the Corpus of Historical Japanese"というパネルセッションを主催し、そのセッションにおいて市村太郎氏(常葉大学)と共同で"Utilization of Speaker Information Annotated in the Share-bon corpus and the Ninjo-bon corpus"という研究発表を行い、ディスカサントのSven Osterkamp氏(Ruhr University Bochum)やフロアの聴衆と議論を行い、本研究課題で明らかになった新事実をより精練させるヒントを得た。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡部 嘉幸	4. 巻 96巻5号
2. 論文標題 洒落本の江戸語と人情本の江戸語 指定表現の否定形態を例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岡部 嘉幸
2. 発表標題 人情本コーパスから見る江戸語の文法
3. 学会等名 総合書物学シンポジウム「書物を耕す 総合書物学の挑戦」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OKABE, Yoshiyuki, OGISO, Toshinobu, MURAYAMA, Miwako, ICHIMURA, Taro, KITAZAKI, Yuho, Sven OSTERKAMP
2. 発表標題 Studies of Early Modern Japanese based on Corpus of Historical Japanese
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ICHIMURA, Taro, OKABE, Yoshiyuki
2. 発表標題 Utilization of Speaker Information Annotated in the Share-bon and the Ninjo-bon corpus
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 金澤裕之・矢島正浩	4. 発行年 2019年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 323
3. 書名 SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------